

名前のタブーと「女言葉」

■タブーと『金枝篇』

フレーザーの『金枝篇』第2部は『タブーと靈魂の危難』と題されている。本稿のテーマに関係するのはその第6章「タブーとなる言葉」で、人名、(親族・姻族)関係名称、死者の名前、王や他の神聖な人物の名前、神々の名前、一般語彙のそれぞれを扱う6つの節からなっている。他の部分と同様、ここでも世界各地の膨大な数の事例が引用されていて、議論は節の構成を超えて錯綜する[Frazer, J.G., *The Golden Bough*, 1913]。

この節で、まず彼の議論を思い切って要約しておけば、次のようになるだろう。

「未開人」は事物と言葉を明確に区別せず、人名を人間の生命的本質の一部分とみなすので、その取扱いに細心の注意を払う。そして、本名を秘密とし、人間の本質に関わらない異名や渾名で代用する慣行が広く見られる。また、「子供の名前に因んで父親を名付ける」慣習も本名を秘匿するためのものだと考えれば、すっきりと自然な形で説明できる。

名前への入念な取扱いが親族・姻族や友人の間で緩和されるわけではなく、大方の予想に反して、最も厳格に履行される。特に夫と妻、夫と妻の両親、妻と夫の両親の間の規制が厳しい。死者の名前への言及も、暫くの間、場合によっては永久に禁じられる。死者に因んで命名された新生児が死者の再来とされるのも、名前が人間の本質的な部分とされているからだ。

それゆえ、王や祭司の名前を危害から守る厳重な措置がとられ、彼らの名前を連想させる語彙の使用が往々禁じられる。同じことは、尊崇する神々の名前についてもいえる。さらに、ある状況では個人名ばかりでなく、動物の名称など、一般の語もタブーの対象になる。しかも、

ありふれた名称が人間の名前となっている場合も多いので、人名のタブーに結びつく。

■子称の解釈

前節に要約したようなフレーザーの見解には、幾つかの大きな問題がある。今、一つの例として、子称(teknonym)についての見解を見よう。「子供の名前に因んで父親を名付ける」慣習は、彼以前は、「母系親族制」で母親が独占していた子供に対する権利を父親が熱望することから始まったと説明されていた。フレーザーは、この慣行と「子供の名前に因んで母親を名付ける」慣習が併存する事実や、子供のない夫婦も擬似的な子称で呼ばれる事実などを根拠として、従来の常套的な説明に反駁している。この批判は正当だ。しかし、それが彼の唱えた説の正しさを保証しているわけではない。

フレーザーは、南アフリカのトランスバールに住むバントゥ語系南グニ群のコーサ(Xhosa)人——彼自身の表記はカッフイル(Caffre)人——に関するダンドリイ・キッドの報告を自説の論拠の一つとして引用し、次のように述べている。コーサ人は、花嫁を彼女の名前で呼ぶのは不躺だと考えてきたのであり、母親どころかまだ妻ですらない婚約者の段階でさえ彼女を「○○の母」と呼んでいる。

だが、こうした子称の解釈は個々の事例の文化・社会的な脈絡を顧みない自分勝手な思弁に過ぎず、明らかに誤っている。小川了がC. ギアツの研究に基づいて、子称に込められた思想とは「過去からの遺産を受け継いだものとしての個人を重視するのではなく、今ある状態をそのままの形で将来にわたって保証する個人が重視される」思想であると論じている[「文明のなかの名づけ」、梅棹忠夫・小川了(編)『こと

ばの比較文明学』、1990] ことを既に紹介した(本連載第36回)。要するに、それは親としての生殖力を讃える思想だというわけだ。

フレーザーが自説の根拠として挙げた、婚約したコーサの娘が「○○の母」と呼ばれる慣行は、私がケニアのキプシギス人の事例で擬似子称と呼んだのと同じものである(同第33～35回)。私は、この慣行を複婚家族における妻単位の「家」の独立性が特に著しいアフリカ東南部の「家財産制」(house property system)と関連付けて考察した。そして、それは婚入した女性の社会的地位の構造的な高さを示しているのだと述べた(同第34回)。

■コーサ人の「女言葉」

フレーザーの理論の可否はともかくとして、博覧強記の彼が引用した膨大な数の事例の中には、注目すべき記述が散見される。

先に見たように、民族社会では、名前の取り扱い上の注意は姻族の間で、しかも直近の間柄で最も厳格に履行されるのが常である。彼らの間では、互いの名前を口に出すことのみならず、その名前に似ていたり、それと共通する音節を一つでも含む一般の語彙を口にすることすらしばしば禁じられるのである。フレーザーは、その恰好の例として、コーサ人の間の「女言葉」を挙げていて、強く我々の関心を引く。本節では、以下にこの部分を忠実に引用してみよう。

コーサでは、妻は夫とその兄弟の誕生名(本名)を表立って使えないばかりでなく、その名前と同根の語を本来の意味で使うことも禁じられる。例えば、夫が猫科の小動物impakaに因むu Mpakaという名前であれば、妻はこの獣を何か別の名称で呼ばなければならない。また彼女は、夫の父親を初めとして、夫の年長の父系男性親族・祖先の名前を思い浮かべることさえも禁じられる。そればかりか、ある語が彼らの名前の強調されるどれかの音節を含んでいれば、その語を使わず、別の表現で置き換えなければならない。この習慣の結果、女性の間にほとんど別種の言語が生み出されている。コーサ人は

これを*Ukuteta Kwabafazi*、すなわち「女言葉」(Woman's speech)と呼ぶ。「女言葉」の解釈は当然ながら困難をきわめる。なぜならば、(Francis Flemingによれば)「それをどんな語彙で言い換えるかについての決まった規則はないし、言い換えに使う語が莫大な数に昇るので辞書も作れない——小馬補注、以下同じ。というのも、(コーサ民族[nation]を構成する)コーサの一部族だけでも女性は数が多いが、他の部族で用いられている代替語は使えず、自分たちで独創した語を用いるしかないからである」。

女性たちがこうした状況にあったのに対して、コーサの男性たちがタブーのゆえにその名前を口にできなかった姻族は、妻の母親に限られていた——また、彼女も娘の夫の名前を口にしてはならなかった。しかし、男性は、妻の母親の名前に関連する語をその本来の意味で使うことを禁じられていたわけではなかった。

■「女言葉」の地域性

すぐこの後にフレーザーは、マコンデ人、バレーア人、ボゴ人などの例を挙げて、ニアサランド(今日のマラウイ)北部では女性は決して夫の名前を口にせず、彼の名前と同義的な語も用いないと述べている。特に、ボゴの女性は、夫の名前を口にするという極悪非道の所業を犯すくらいなら、(性的に)夫を裏切の方がまだましだと考えていると書いている。

さらに、私が長年調査したケニアのキプシギスでも、夫婦が互いに幼名を呼ぶことを禁じるタブーがある。少し前までは、妻は夫の幼名と同義的な語も口にしなかった。

このようにみると、コーサと類似の慣行はアフリカでかなり広く見られたといえる。ただし、次回に詳しく見るように、ズールーにも「女言葉」と呼べるものがある。すると、南部アフリカのバントゥ語系南ンゴニ群の集団で特にこの種の名前のタブーが発達したようにも思われる。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)